

# CLASSIC VICUS

2015 No.10

Vicus= ラテン語で地域、界隈の意

## 金を出しても口出さないパトロネージ ～歴史はパトロンが音楽家や美術家を育ててきた～

協会監査／ジャーナリスト 志村 嘉一郎

巖流島で佐々木小次郎を倒した宮本武蔵は肥後・熊本に下り、細川家の客分となる。ここで剣を捨て書と絵画に没頭した。五輪書を著し「鶴図」や「紅梅鳩図」など重要文化財になった墨画を描き、細川家に置いていった。細川家は、代々、文化人や芸術家を育てる家風が受け継がれて来た。16代当主の細川護立氏は、広大な東京・目白の屋敷に芸術家を食客として抱えていた。

酒が欲しければ酒を出し旅に出なければ旅費も出す。その代わり芸術家たちからは盆暮れの年二回、作品をもらうのである。横山大観の重要文化財「生々流転」は細川家の食客だった大観が、細川家に置いていったものだ。梅原龍三郎、安井曾太郎らのほか、志賀直哉、武者小路実篤など白樺派の面々もパトロンとして芸術家を育てた。このようにして集まった芸術作品は、細川家の美術館「永青文庫」に保存されている。以上は筆者が、17代当主の細川護貞氏から直接、伺った話だ。

### 古くから音楽家を支援

クラシックの世界でも、古くからパトロンが音楽家を支援してきた。王室や教皇、貴族、教会聖職者、商人などで、音楽家に豊富な資金をあたえ舞踏会や宴会の演奏、記念日の作曲などを見返りに求めた。オーストリアの外交官スヴィーデン男爵はバッハやハイドン、モーツアルトのパトロンとして知られる。ザルツブルグのコロレド大司教はモーツアルトのもう一人のパトロンだった。パトロンがいないといわれたベートーヴェンでも、ワルトシュタイン男爵にピアノソナタ第21番を献呈している。ショパンのパトロンは伯爵未亡人のジョルジュ・サンドで、二人で地中海のマヨルカ島まで逃避した話は有名。「金は出しても口は出さない」パトロネージが、クラシック音楽を育ててきたのである。

### チケット気にする現代の経営者

最近、IT企業の創業者が東京のあるオーケストラのスポンサーになった。コンサートのチケットが売り出されると、心配のあまり「今日はチケット何枚売れた」と事務局に電話をかけてくるという。事務局では初めてのことなのでとまどうばかり。ITの業界では、インターネットのアクセス数が膨大で、良くて安い商品なら瞬時に売り上げが急増する。クラシックの世界ではそうはいかない。ファンは、コンサートの中身を調べて自

分の好みにあうかどうかを考え、日程を調整し入場料を検討して、初めてチケットを申し込む段取りだ。

### 非生産的な音楽事業

経済学的に見ると、音楽業界は拡大再生産の世界でもないし単純再生産の世界でもない。資金を注ぎ込んで利益を出したり、配当をもらう世界ではない。経済的には成り立たない世界で、資本家からみれば単なる浪費の世界なのである。オーケストラの経営は、ほとんどが人件費、演奏会収入だけでは赤字で、スポンサーや国・自治体の補助金をもらわなければやっていけない。コンサートの運営も、入場料収入から演奏家のギャラとホール使用料、宣伝広告費などを除いて少しあまれば、音楽事務所の経費となるだけ。チケットが売れなかったり、演奏家のギャラが高かかったりすれば赤字になってしまう。したがって、企業や自治体にパトロネージを求めざるを得ないのである。

音楽業界は、スポンサーからのお金を大事に使わねばならない。チケットを売る努力をしまだな経費を省いて運営することが肝要である。しかし、音楽会の中身がファンの鑑賞に耐えなものでは困る。

### 企業利益を精神の糧に

スポンサーにあっては、音楽業界に金を出す以上、企業の利益を人間の精神的な糧に使っているのだというほこりと満足感をもって、支援していただきたいものである。

### 政治的な大阪問題

大阪で大変なことが起きている。日本の伝統芸術である文楽に対する補助金が打ち切られたのに続いて、オーケストラに対する補助金がゼロとなった。知事や市長の特別な考え方によるものだが、自分たちの主張を進めるために膨大な選挙費用を何度も支出しながら文化予算をゼロにするのはいただけない。これはパトロネージやスポンサーの問題ではなく、「文化を認めない」という首長のイデオロギーの問題である。いち音楽業界の問題ではなく、大手マスコミや知識人、学者などを巻き込んで「文化を認める行政」を旗印にした政治運動にする必要がある。

# 演奏家に必要なトレーニング

～楽器だけでなく体にもメンテナンスを～

講師 スポーツトレーナー 萩山悟史

記録的な日照不足となったこの4月、久しぶりの快晴に恵まれた22日。今年度最初の勉強会が東京文化会館会議室で催された。東京では桜の見ごろも終え、寒暖の差がからだに応える時期で、体調管理にも一段と神経を使わなければならない季節、ということもあり、会員兼岩氏の紹介でスポーツトレーナーの萩山悟史氏を講師に迎え、たいへん有意義なお話を伺った。

萩山氏の簡単な自己紹介のあと、キーワードの説明を伺いながら進行。協会のメンバーのほか現役演奏家も何人かが加わった21名が参加。開始直後から全員が集中して取り組んでいるようだった。以下、萩山氏のレジュメをもとに内容をレポート。

## 多くが体に問題

演奏家の多くは、からだのどこかに問題を抱えているようです。だるさ、痛み、こり等、症状や重さのちがいはひとそれぞれ。具体的には腰痛、腱鞘炎など多くの人が悩んでいるのが現状です。しかし、「パーソナルトレーニング」を受けたことのある方は、それほど多くないと思います。

トレーニングというと、運動選手など「肉体を鍛えているひと」のため、と思われるがちですが、運動とはスポーツに限らず呼吸や日常生活の動きも含まれます。身体を動かすことはすべて運動と言えるでしょう。スポーツトレーナーとは運動の専門家です。

それでは、演奏家にとって必要なトレーニングとはどのようなものなのでしょう。演奏家は楽器を演奏するにも歌を歌うにも、特定の筋肉を酷使しています。求められている音楽（運動）を達成するために日々「練習」というかたちで使い続けているわけです。

一方、演奏家の方は「筋肉を使う」という観点で自らのからだを見ることがないのではないかでしょうか。意識の問題ですね。演奏家は演奏するにあたって、筋力、柔軟性、精神力はもちろん、バランス、姿勢の良さ、察する力、身体の感覚など本能的な部分も必要な能力です。みなさん専門の分野で特に必要な能力もあるでしょう。しかし、基本は歩き方から改善することだと思います。

リサイタルなど、本番で袖から舞台中央まで歩き、一礼をして演奏を始める。その一連の動きが美しい人というのは、とても良いと思います。また、座り方の良いひとは良い演奏をするのではないでしょうか。日々体調は良くなったり悪くなったりと波がありますが、この波をなくすことはできないので、まずは全体のアベレージを底上げするイメージを持つことが大切になります。からだに関心を持って意識を高めていくとからだのアンテナが繊細になっていきます。どんどん敏感になっていくことでアンテナの感度をあげることが大切です。

つまり、演奏家に必要なトレーニングは、演奏に必要な能力を引き上げるためのトレーニングということになります。

## コンディショニング

コンディショニングは聞き慣れないことばですが、コンディションとは体調のことです。そして、コンディショニングとは体調管理のことと言います。

演奏家は本番の日が決まっています。本番当日から逆算して、1年、半年、3ヶ月、1ヶ月、1週間など期分けをしてコンディション作りの計画を立てることが大切です。本番に向けて曲を仕上げるのと同じように身体も段階を追ってコンディションを



整えることが理想です。スポーツの世界でいうと、オリンピック選手は4年を1サイクルとして計画しています。

日々、体調は変化します。良いときもあれば悪いときもあることを念頭に一定を目指すのではなく、これ以上は悪くならないようにという最低ラインを意識するように心がけましょう。

トレーニングはコンディショニングの一部です。食事や睡眠、入浴、ストレスのコントロールなども大切なポイントです。

## 痛みは二種類

痛みには大きく分けて二種類あります。骨折、捻挫、打撲などの「外傷」と、肩こり、腰痛、腱鞘炎などの「障害」です。「外傷」は、時間の経過とともに治るので、「障害」は、日々の積み重ねで起こるものです。演奏家の痛みのほとんどは「障害」です。「障害」は筋力や柔軟性の不足、演奏フォームに原因があるので、日頃のケアでリスクを軽減することが可能です。再発しやすいため、何が痛みの原因になっていたのかを見極めて根本からの解決をすることが必要です。

## 悪い姿勢は猫背

なによります、姿勢が大切です。演奏家の方の代表的な悪い姿勢は猫背です。頭が前にでて、顎があがり、肩甲骨が離れて、背が丸くなり、腰も落ちます。これは楽器を持たないでトレーニングをすることにより改善します。楽器をからだの前に構えることにより、大胸筋が固くなることで猫背になりやすくなります。猫背になると呼吸が浅くなりがちなので、胸をひらいて呼吸がしやすい姿勢を作ることがポイントです。

ここで、動いてみましょう。からだにとって自然な、向き、動きを知ることが大切です。みなさん、立ち上がってみてください。直立したときの手のひらの向きはどの向きが自然なのかわかりますか？手のひらは、うしろですか？前ですか？実は「前」

が正解です。それでは、両腕をまっすぐ前に上げてください。このときにも実は手のひらが上を向くのが解剖学的には自然な姿なのです。余談ですが、ピアノ演奏も手のひらが上を向くほうが自然なのです。やってみると解りますが、指の動きがスムーズです。

### 肩こりが楽になる

それでは、ウェイターがお盆を持っているように肘をまげ、手をうしろへ伸ばすストレッチをやってみましょう。伸ばしている手の反対に首を傾けて。これは脱力がポイントです。そして、息の吐きかた。脱力して息を吐くと、筋肉がのびているのがわかりますね。吐くときにのばします。筋肉はゴムチューブのようなもので、硬くなると伸びなくなりますから弾力を作ってやります。このストレッチで肩こりは楽になります。

次は後ろで手を組んで前にかがみます。肩甲骨は寄せたまま5回くらい深呼吸をして戻ります。演奏は技術練習ですが楽器を思い通りに扱えるようになるためには、楽器を持たないで体を作ることも大切なのです。

楽器を持っておこなう演奏は技術練習です。楽器を思い通りに扱うためにはまずは、からだを思い通りに動かすことができるこれが前提です。演奏家は楽器の音の出る仕組みを理解していると思います。からだについても仕組みを理解して扱う意識を持ってください。楽器にもメンテナンスが必要なように、からだの調律師としてスポーツトレーナーがいることをぜひ知つてもらいたいと思っています。（ストレッチに関しては後述の著書「演奏者のカラダストレッチ」を参照ください）

このあと、数人の質問や意見を受けて、マッサージの効用、

呼吸の大切さ、緊張に対する対処法などの質問や意見を受けて、閉会。今回は時間的制約もあり、個々の事象を詳しくは伺えなかったが、個人的に思い当たる方は、専門的な知識をもとに経験を積まれてきた荻山氏の門をたたいてみるのも良いかもしれません。

老若男女を問わず、日頃から身体のことを気づかって生活をする習慣のない多くの音楽家たちのために、健康を維持すること以上に身体的な気づきが音楽そのものまでも変えてしまうという、なかなか奥の深い内容であった。特に、からだの各部分をパートとして考えながら、からだ全体の一部であることを忘れないこと、それぞれがバランスを保ちながら健全な状態であることが大切なのだということを学んだ。荻山氏によれば、「『第三者の視点を持つこと』です。自分のことを天井からもうひとりの自分が見ている様子をイメージすると、客観的に自分を見つめることができます」とのこと。

良い演奏をする一助として、からだを整えることに取り組んでみるのは大変意義深いことである。

（以上 レポートは パルテノン多摩 梅津知美）

### 【荻山悟史 プロフィール】

2007年より演奏家のパーソナルトレーニングを始め、ヴァイオリニスト久保陽子さん、ピアニストの平尾はるなさんなどのトレーナーとして活躍。著書：「演奏者のカラダストレッチ」ヤマハミュージックメディア刊  
演奏者専門パーソナルトレーニング BodyTect スタジオ トレーナー  
HP : <https://bodytect.amebaownd.com/>  
Mail : bodytect@gmail.com



## 儲けより良い歌手を ～日本の声楽レベル向上が願い～

(株) 東京プロジェクト 代表取締役 在原 勝

まず自分の自己紹介からお話をします。1939年、昭和14年6月8日生まれ。この日作曲家のシューマンが生まれています。千葉県君津郡長浦村、今の袖ヶ浦市、まあ、あたりに何もない「関東の蝦夷」なんて呼ばれていました。今はすっかり変わってしまって、住友化学とか工場群の街になっています。地主の分家で、半農半漁が多い土地柄で、父は大工の棟梁。およそ文化の香りのない村でした。地元の県立木更津第一高校（現木更津高校）から藝大の声楽科を卒業して、今75歳になります。

小さい頃から歌うことが大好き。学芸会でよくミュージカルナンバーの白雪姫の「七人の小人」などを歌うと、たいそう喜ばれたものです。ただ地元の学校に音楽の先生がいなかったので、全く自己流です。そういう内、中学2年の時に新任のとても美しく若い女の音楽の先生が赴任して来られたんです。大野幸先生というお名前ですが、この先生との出会いは一生忘れられません。

年上の（もちろんそれはそうでしょうが）女性、出身大学は藤村学園、今の東京女子体育大。あの新体操で有名な女子大です。そこの児童教育科を出られて赴任されたんです。早速音楽部というものをつくりまして、私はその先生に歌を聴いてもらったら、当時の日本学生音楽コンクールの千葉県予選に出たら、と言われ、出たら優勝しちゃったんです。平井康三郎の「九十九里浜」とイタリア民謡「オーレ・ソレ・ミオ」。そしてその後、当時日本放送が主催していた日本学生音楽コンクールの全国大会でも優勝したのです、それで完全にその気になってしまいました。

ここで問題は親父です。早速「歌の勉強がしたい」と言ってみたのですが、当然大反対。「もう勘当する」と言っています。でもせめて高校は行かせて欲しいし、大学にも行きたい。そこでいろいろ策を練りました。

### お金が無いから藝大だ

まず私立の音楽大学はお金が無く無理だろうということで、絶対藝大だ。国立だから学費は安い。でも「藝大の声楽科」なんて言ったら、どういうことになるかわかっている。そこで思いついたのが「東京藝大美術学部建築科」、「一世一代の嘘」とはこういうことを言うんでしょうね。「大工を継ぐために勉強するから藝大の建築科を受ける」と父に言って大学を受ける事を許可してもらいました。

父にはばれると大変なのでレッスンなんて受けられないから、高校時代は、地元の中学校の講堂にピアノがあったのを思い出し、夜になると「遊びに行く」と言って家を出て、その学校のピアノでバイエルを練習していました。もちろん、中学校には許可をもらって。

ちょうど藝大の師範科を出た林秀樹先生が高校にいて、この先生に教えてもらいました。藝大の声楽科に入るまで御世話になりましたが、独学でバイエルは64番まで、その先にはいけなかつたんです。時間がなかったし、その頃の高校は徒手体操が盛んで、木更津第一高校はかなり有名でした。俳優の千葉真一なんかもいたりして私も夢中になりました。（なんでも夢中になるんです）。それも喉の筋肉まで固くなると言われたので、途

中でやめました。本当かどうかはわかりません。

そして試しに藝大を受験したんです。一次が課題曲、二次自由曲、トスティの「Vorrei」を歌って、声楽科男性受験者60人の内のテノール8人に残り、あとはピアノだけ。日本を代表する歌手になった森敏孝などもその中にいました。

さて難関のピアノの試験、普通はここまで来ただいたい皆試験に通るそうなのですが、課題曲はベートーベンのピアノ・ソナタ。有名なやつで今でも旋律を覚えていますが、試験官に安川加寿子先生がいて、つかつかと私に近づいてきて「とにかく弾いたら合格よ」とおしゃったけれど、私はピアノは全然準備していない。ハノンも全然できない。何せ独学でバイエル64番までしかやってないので、ソナタなんて持つてのほか。全然準備していないので「また来年来ます」と言ってその場を去ったのです。そこで入学していたら二期会の高丈二などが同期生になったのですが。

さて結局1浪して再び受験。歌には自信がありましたが、ほとんど自己流です。誰にレッスンをしてもらった訳でもありません。風の吹く日に海辺に行って発声練習。演歌歌手みたいですが、歌っているところなどを人に聴かれたりしたらどういうことになるか、それは最大の注意をはらったのですが、「大工のせがれは海で大声出して、頭でもおかしくなったんじゃないかな！」なんて言っていたそうです。浪人中は家の手伝いをしながら、一年間、中学校のピアノで練習しました。歌の実力には自信がありましたので、もちろん合格したんです。

さてここでまた大事件、当時国立大学の合格者は新聞で名前を発表するんです。親父は「建築科」と思っている。新聞を見た親父の目が点になった。そこにはちゃんと「東京藝大声楽科在原勝」と記載。その時の親父の顔はなんとも忘れられないですね、うーん。。。。今思い出してもそれはねえ、なんとも言えない。ただ親父はううすわかっていたみたいでした。

さて入学はしたものの誰にもレッスンを受けていないので、どの先生も私を弟子にとってくれない。そういううちに、あの四家文子先生が手を挙げて下さいました、五十嵐喜芳は「私が育てた」が口癖で熱心に教えて頂きました。ただ私は勉強を続けていくうちにずっと疑問を感じるようになり、「本格的な发声とは違うのでは」と思い始めました。

### アルバイトで留学貯金

学生時代は日本育英会の奨学金を9,000円毎月もらっていました。今で言えば10万円を超える価値があるでしょう。通学の交通費や生活費を引いても余ったんです。私は海外留学のため貯金することを考えました。寮に入ったってお金はかかるから自宅の木更津から2時間半かけて毎日上野に通いました。アルバイトもバイエルの途中だったのにもかかわらず、子供にピアノを教えました。

当時職場のコーラスが盛んで、思い出すだけでも東京銀行本店、住友化学、宇部興産などのアマチュア合唱団の指導がたくさんできました。日本合唱協会では準団員になって歌謡曲のパッ

クコーラスまでやりました。三橋美智也とか、多くの歌手のバックも務めましたし、ありとあらゆる音楽業界のアルバイトをしました。

### いざ、イタリアへ

卒業して尚美学園に3年勤めました。その内約300万円貯金ができましたので、それを持ってイタリアに留学したんです。ローマ・サンタ・チェチリア音楽院です。

言い忘ましたが、学生時代につきあっている女性がいました。婚約後、彼女から「結婚したら留学が困難になるかも」と言われ、「3年間待って、必ず帰ってくるから、その後結婚しよう。」と約束しました。後日談になりますが、結局私は留学して3年後、帰国して何処かの大学に就職を、とも思いましたが、3年では何も習得出来ない。「もっと極めたい」と思いだし相談したら、「納得出来るまで勉強したら」と彼女から言われ、ほぼ決まっていた大学の職を諦め、留学を続ける事にしました。結局イタリアに13年間もいたんです。要するに、約束していたとはいえ、彼女は13年間も待っていてくれたんです。それを知った時うれしかったですね。ほんとに「こんな女性は絶対に幸せになくては」と強く思いました。それが今の家内です。家内も藝大声楽科の同期で、NHKの歌のお姉さんの○代目?名前もたぶん皆さんご存知かな…?

イタリアでは、あの有名な教師ジョルジョ・ファバレット氏につきました。裕福でないので、またここでも今度はイタリア政府の奨学金をもらいました。サンタ・チェチリア音楽院に3年、アカデミア・サンタ・チェチリアに3年。ずいぶん悩みましたが、2年や3年で帰国したらなんにもならない。「もっともっと勉強したい」という気持ちが強くなり、結局6年奨学金で留学していました。その後も「40歳まではなんとしてもイタリアで頑張ろう、そこでダメなら帰国しよう」と思っていました。

### 40歳でやっと帰国

藝大の先輩本間登氏には大変助けられました、「浜清」という日本料理店や、日本人観光客の通訳やガイドのアルバイトもよくしました。何としても「イタリアでデビューしたい」と思っていたのですが、日本人にはイタリアの劇場は扉を開いてくれなかった。当時はイタリア国籍がないと、劇場での仕事がもらえなかつたのです。皆さんご存知の林康子さんとか松本美和子さんとかは、皆さんイタリア人と結婚してイタリア国籍を持たんですね。まあそれだけではなく、実力があったのですが、だから女性は実力があればイタリアで活躍出来る人もいましたが、男性ではイタリアの劇場で歌える日本人はいなかつたのです。それで40歳になった時に、始めて決めていたように、帰国することにしたんです。

イタリアではイタリア語の勉強を兼ねて、女性の友人を多く作りましたが、そう女性とも縁がなかつたです。13年いて2人くらいですか?日本に婚約者もいましたし、それくらいなら許されると思いませんか(笑)?そして帰国してたら、さっそくお話しした婚約した彼女が待っていてくれたのです。私たちはすぐに結婚しました。

### 東京プロムジカ21発足

帰国後、仕事をしなければ、と思い私立の某音楽大学に声楽教諭として勤めましたが2年ほどでやめてしまいました。日本の音大のシステムは昔とちっとも変わっていなかった。一週間に二度の20分ほどのレッスンで何が教えられますか?本当の意味での指導が出来なかったのです。

その次に私は「東京プロムジカ21」という会社を起こすんですが、時はバブルの時代の到来、ある不動産会社の社長が資金援助してくれたんです。ですがとにかく会社の経営なんて何も経験がないものですから、さてどうしたものかと思案した結果、イタリア語ができるし、イタリアを中心とした声楽家の情報を持っている。「大物声楽家の来日公演で本物を聞かせ商売できるのでは?」と考えたわけです。

ただし、マネジメントの知識やノウハウなんてまったくない、そこで当時音楽事務所として成功していた「神原音楽事務所」の神原社長を訪ねたんです。ところが相談したところ、こう言われました。「在原君、この仕事を続けて畠の上で死んだやつはないんじゃないじゃ、だからやめときなさい。特に声楽家を呼ぶたって病気になってキャンセルになったらどうしようもないんじゃないよ。」と言われてしまいました。そうしたらムラムラと「神原さんでもやらないんなら俺がやってやろうじゃないか!」と思ってしまったんです。

### 神様を招聘

それにはまず「大物オペラ歌手を招聘して会社を知ってもらう」という思いから、まずあのイタリアの名テナーで「イタリアオペラ団」の来日公演で日本中のファンに知られていたカルロ・ベルゴンツィを呼ぶことにしました。

ベルゴンツィは学生の頃の私にとって神様でした。完璧なベルカンント唱法で、しかもフレーズの作り方がもう絶妙にうまい。招聘し公演後、彼に決められたお金を払う時、僕はすごい優越感を感じました。だって昔『神様』と思っていた彼に、現金で払うんだもの。一回300万円ぐらいだったと思います。客は良くなりましたし、その後ベルゴンツィで「引退公演」と銘打った公演を3回やりました。始めは本当に「来日最後」と思っていたのですが、まだできる、まだできる、という感じですね。

次はスペインの名テノール、アルフレッド・クラウス。日本には「イタリアオペラ団」で『ファウスト』に出演して、これもものすごい人気でした。「三大テノールはおかしい、だって俺が入っていないじゃないか」なんて言っていました。ものすごいハイCを出すんです。たしかインターナショナル・アーティストと言ったと思うけれど、そこのアルベルト・ミリーさんというマネージャーが、「ご祝儀だ」と言って、日本行きを交渉してくれたんじゃなかったかな。

### 本物をわかってほしい

その頃から私はささやかながら、主催公演の時は必ず学生用に50席を用意して、本物を聞かせたいと思い、無料で招待することにしています。それは創業以来ずっと続けています。それなのに最近はチケットが余ることもあるんです。音大の歌のレッスンっていうのは本當になつてない。声を作らないから韓国にも最近では中国にも負けている。だって海外の劇場で活躍し

ている現役が今何人いますか？かつては大橋国一さんや、ほかにもいたんです。このままでは日本人で国際的に認められるオペラがやれなくなってしまう。本物を観て聴いて違いを知ってほしいんです。音楽の基礎は世界一。発声がだめ。素材はあるのに。だって私の招待で学生が聴きに来ることを声楽の先生はいい顔しないんだもの。「私のやっていることと違うって」。本当に私は、だからそういうこともやめられないんです。私の学生時代もそうでした。日本の歌を勉強する学生に同情しているし、なんとか良い方向に行って欲しいんです。本物を分かって欲しいんです。

### 数々の大物たち

その後バブルが弾けてスポンサーがいなくなってしまいましたが、バブル時代の蓄えで「東京プロムジカ」を今度は自分で設立するくらいの資金はできました。そして東京プロムジカは「大物を呼ぶ」というイメージがだいぶ付いてきたところで、バブルも弾けましたし、その後は「無名でも自分が気に入った実力ある歌手を呼ぶ」というようになりました。ですから大物でなくとも「プロムジカの招聘なら」という感じで集客もできるようになってきました。また、歌手以外にもいろいろ有名音楽家を招聘してきました。

ゲリンガスというロシア人チェリストは当時ハングルグ郊外に住んでいましたが、ドイツ語や英語は話せるのにイタリア語が話せず、ロシア語の通訳がいつもついていました。彼には「私はイタリア語と日本語しか話せないから、イタリア語を話してくれたら日本に呼んでもらえるよ。」と言ったら、1年後本当にイタリア語を話せるようになっていました。そうしたら、しょうがない、呼ぶしかありませんから、數度招聘しました。

それからピアノの巨匠チッコリーニ、この人はフランス系のイタリア人で飛行機に乗れない。飛行機が大嫌いなんですね。来日予定日に羽田空港に迎えに行ったのですが、予定の飛行機のタラップから降りて来ないんです。飛行機の中はついに誰もいなくなってしまって、「これは大変だ」と思いパリのマネージャーに電話したら、ミラノのホテルにいるんですよ。なんとか翌年来日もらいましたが、飛行機に乗ってもらうのだけは大変でした。

ほかにはウート・ウーキ。彼は、少々情緒不安定な面があり、本番直前、「もう出なければいけない」という時になって、これから弾くヴァイオリンを選ぶのにまだ迷っているんです。それで私をつかまえて、「どの楽器で弾けばいい？」と言うんです。私もすかさず「それはあんたが決めることでしょう」と言ってやりました。ですが最終的には「こっちで弾け」と適当に言って、なんとか舞台に送り出しましたが、やれやれでしたね。どちらも名器なんですよ。確かガルネリとストラディヴァリだったんじゃないかな。

そういうおかしかったのは、フローレス（Ten）のマネージャー。空港で待っていたら、フローレスは出てきたのに、マネージャーだけ出てこないんです。聞いてみたら、パスポートの期限が切れていて日本に入国できない、と言うんです。でも飛行機には乗っていて、イタリアは出国出来たんですよ。おかしいでしょ？それでイタリア大使館にお願いして、大使館でパスポートを

更新してもらいました。

またある時、皆さん若い人はあまりご存知ないかもしれません、「サンレモ音楽祭」というイタリアの大きな音楽祭を招聘しました。音楽祭にはジュリオラ・チンクエッティなんていう女性歌手が出ていて、彼女は日本でも有名でした。その音楽祭は定期的に音楽監督が代わり、ピッポ・バウドという男が司会者をしていました。彼はソプラノ歌手のリチャレルリの元旦那です。そして音楽監督はアラゴツツィーニという人になりました。彼は私のローマ留学時代からの友人で、彼が音楽監督になった暁には、「世界の5大都市」ツアーをやる、と宣言して音楽監督になってしまったそうです。そこでどうしても世界を回らなければならない、ということで、友人であった私が東京公演を頼まれました。音楽祭の丸ごと巡業です。ただし頼まれてから公演可能日までが数ヶ月しかないです。ホールなんか探したって都内で空いている所は無い。あわてて空いていた浦安のベイNKホールを予約して、たまたま知っていたヒデとロザンナに声をかけ司会を頼みました。そしてNHKBSも収録してくれることになりました。あの時はチラシまきから何から何まで寝る間もなく、普通1年以上掛けてやるところを、2,3ヶ月で全てやりました。その結果なんと3千人のベイNKホールがほぼ満員になりました。

### リハーサル会場に現れず

2月28日に到着した一行は、すぐその脚でリハーサルの予定でしたが、リハーサルになっても誰も会場に現れないんです。イタリア人はおおらかなものですね。彼らにとって日本での滞在は、到着日と本番の2日しかないんです。だからみんな観光に行ってしまったんです。我々は仕込みその他でほとんど徹夜までして苦労して準備していたのに。ですから我々日本人スタッフにとってはぶつけ本番になってしまいました。

ただそういうことも含め、招聘や公演の開催などはローマ留学時代の友人に負うところが大きいですね。多くの友人が本当に手助けになりました。マネージャーのアルベルト・ミリーとか、その後「カンツォーネの神様」と言われた河合秀朋氏など、良い友人もたくさん持てました。

### 強い意志があれば必ず

長い年月の間にいろいろあったけれど、一つ言える事は「自分が本当に『やりたい』と思った事は、強い意志があれば必ずできる。」ということかな。できない人は意思が弱いんです。僕は藝大しか選択肢が無かったです。家も貧しかったし、歌もピアノもほとんど誰にも教わらなかったです。しかし、藝大に独学を入れました。藝大の声楽科が主科で、副科のピアノは谷康子先生に教えてもらいましたが、ベートーベンのソナタなど、とても指が回らないので、歌の伴奏ができるように、と讃美歌集のコラールを初見で弾くことでなんとか進級させてもらいました。その甲斐もあってバッハのインベンションならゆっくりだが弾くことができるようになりました。そんな程度でしたが、ピアノも弾けるようになりましたし、その時にピアノのレッスンとして弾かせてもらった讃美歌集の初見は、後で歌の伴奏にとても役に立ちました。

とにかく僕は好きなことをやってきたんです。そしてそれをやって来れた事がとてもうれしいです。だって、さっきも言いましたが、会社の経営もマネジメントのノウハウだって始めは知ら



なかったんです。ですが、プロムジカという会社をつくってオペラ歌手とのつきあいが長くなり、多くの友人の助けで今年で 27 年にもなりました。

最後に思い出話になりますが、ベルゴンツィが来た時、母校の藝大に連れて行って公開レッスンをしてもらったことがあります。私はイタリア語はほとんど日本語と同じように話せますが、その時のレッスンには、思うところがあって、別にイタリア語の通訳をつけたんです。レッスンが始まって少ししたら、いきなりあの温厚なベルゴンツィが怒り出しました。彼が言うには「この生徒達は皆よく歌えているが決定的に発声がだめだ、それを直すには彼らを教えている先生にまずレッスンしなければどうしようもない。音楽的素養はあるのだが、一番肝心な声を出す楽器作りができていない」と怒っていました。最初に危惧したようになり、私の通訳ではいくらベルゴンツィの言葉でも、聴講している友人の先生方には私は言えなかったのです。だから当日の通訳は別人にお願いしたという訳です。

### 呼吸法が基本

声帯を鳴らす呼吸法ができるなくては、国際的に活躍できる歌手は育たないのです。日本にもかつて海外のオペラ劇場で歌つていた人が多くいましたが、今は藤村美穂子ほか数人ぐらいです。彼女もドイツでしょ、オペラはやっぱりイタリアですよ。日本人では誰もいないんです、活躍している人が。かつては市原多朗さんなんてイタリアやメトで歌っていたんですが。

昨年もイタリア、ブッセッタ市の「ヴェルディの声 声楽国際コンクール」の審査員を頼まれてイタリアに行ったんですが、一次予選を通った 150 名の内、日本人はたった 4 名、韓国や中国にも負けています。決勝の 8 名には誰も日本人は残りませんでした。楽器が違うんです。基本的な呼吸法ができるないことには話にならない。とくに男声はどうしようもない。

私のマネジメントはとにかく良い歌手を連れてくることに尽きます。儲けなくてもトントンになればいい。本物を聴いて頂き、日本の歌手も良くなつて欲しい。日本の声楽のレベルを上げたい。という思いが益々増しています。そのためには声楽の教育を考えなくては、という思いですが、その辺を課題として私のお話もこの通りで終わらせていただきます。

2014 年 2 月 13 日 音楽プロデューサー協会例会にて  
記録 小林信一（合唱音楽振興会事務局長）

### 【小林より】

なかなかいい話でしょう、僕も声楽家の道を進もうと思って作陽に行つたのです、歌は魅力です、在原さんは本当に立派な方だと思いました。



## テレビの仕事からクラシックに

テレビマンユニオン エグゼクティブプロデューサー 村田 亨

私は音楽プロデューサー協会に入っているものの、会員の皆さんとはだいぶ違って、クラシック音楽を好きだったわけでも、クラシックをメインに仕事をしてきたわけでもなく、テレビの世界で仕事をしてきたので、皆さんのご参考になるような話ができるのかどうかわかりませんが、少し話をしてみます。

大学ではロシア語を専攻していました。芝居が好きで演劇部に入り、演劇をやったり、観に行ったりもしていましたが、全くクラシック音楽には縁のない生活をしておりました。クラシックは好きでも嫌いでもなく、芝居に使う音楽を選曲するためにレコードを聴くという以上の興味はなかったんです。ただ、ある時友人に連れられてチャイコフスキーの悲愴を聴いたのですが、友人に「悲愴を聴いて泣けないか？！泣けるだろ！」と言われて、当時の私は音楽に対しては何も思わなかったのですが、友人の態度を見て、「音楽で人は感動するんだな」ということを感じたことを覚えています。

### テレビマンユニオンの創立

大学卒業後は、その頃まだ民間で自由に行き来のできなかった中国との貿易を行う会社になりましたが、間もなく「文化大革命」の波を受けて往来も不自由になり辞めることにして、マスコミの道に入りました。

その後、TBSで朝のワイドショー「おはようippon」や、今でいうバラエティ番組やクイズ番組をやっていました。時は「成田空港」開港に伴う反対運動の真っ最中で、TBSにもその風が吹いていました。

そんな中、萩元晴彦、今野勉、村木良彦さんたちを中心とするメンバーが、テレビ番組制作会社として「テレビマンユニオン」を作るということになり、他のメンバーと共に誘われて、テレビマンユニオン創立メンバーとして参加しました。若いメンバーが多くたつたし、「自分が作りたい、自分がやりたい仕事をしたい」という人たちが集団として『合議・対等・役割分担』という関係のメンバー制度を作った、1970年2月25日に日本初のテレビ番組制作の独立プロダクションとして25名のメンバーでスタートしました。

### 「オーケストラがやってきた」

当初は夜のテレビショッキーや、音楽番組や、「遠くへ行きたい」などを作っていたのですが、創立2年目に電電公社（現在のNTT）がスポンサーで音楽番組を制作するということになり、萩元さんの先輩である山本直純氏に相談、小澤征爾さんのアドバイスもあって、バーンスタインがアメリカでやっていた「ヤングピープルズコンサート」のような番組を、という企画で、オーケストラが主役の番組「オーケストラがやってきた」を制作することになりました。

オーケストラが日本中を訪れるという画期的な番組でしたが、毎週そんなスケジュールで動けるオーケストラを探すのは大変だったようです（私は番組が始まっての参加でしたから、この辺りのスタート以前の詳しい話は伝聞です）。そんな時に、結成されたばかりの新日本フィルが協力する、ということで直純さんや

小澤さんも共に喜んで参加してくれることになりました。

萩元さんのアシスタントとしてこの番組に関わるようになり、オーケストラとの関係を密にすることの必要を感じて、そのためにはクラシック音楽を日常的に聴く機会を持つということで（最初は「仕事だから、しょうがないから」という気分だったかもしれません）、クラシック音楽ファンでもある家人を誘って新日本フィルの定期会員になり、それからは他の演奏会も聴きに行くようになりました。こんなところが深くクラシック音楽に関わるようになったきっかけです。そして、結果的に一流の演奏家の演奏を聴いたり、お付き合いの関係も出来て、演奏家がどういう人たちなのか、演奏するだけの人じゃない、という事がわかっていました。

この「オーケストラがやってきた」という番組では、とても画期的なことをいろいろやりました。直純さんの発案で会場のお客様から見えやすいように「立って演奏する」という事をオケのメンバーにお願いしましたが（今まで立ち上がって演奏するなんてことはよくあることですが）、当時は演奏者からは「立て演奏するなんて！」と言われ、特に弦楽器の人たちに立ってもらうのはとても大変でした。

その他にもいろんなパフォーマンスをオーケストラにお願いしました。海外の演奏家は演奏以外のパフォーマンスをすることにそんなに抵抗がなかったのです。パールマンもスターも理解してくれて、お客様にわかりやすくするために、ということで音楽的に問題がないことは何でもやってくれました。しかし日本人の演奏家は、それをやって貰うのが本当に大変でした。ある時、水戸黄門の「助さん」「格さん」の格好をして欲しい、とお願いした所、「そんなことができるか!!」なんて怒られたりしました。結局はやつてくれましたが…今でも、当時思い出すと「よくあんなこと頼めたなあ～クラシック音楽の素人だったから出来たのかな。」と思います。

ここで本日DVDを持ってきましたので、当時の番組を見てみましょう。ちなみにこのDVDはこの度、4巻BOX 15,200円（税別）で30年ぶりに復刻発売しましたので、ぜひ皆さんお買い求めください（笑）。<アマゾンや楽器店等でご注文できます！>

【といって、最近発売されました「オーケストラがやってきた」のDVDを皆でしばらく鑑賞。当時のパフォーマンスや、現在大御所となった演奏家達の若い頃の映像を見て、会員皆が昔話に花を咲かせることになりました。そして映像を見ながら解説もありました。】

### 人を魅せる工夫

今までNHKやテレビ朝日のクラシック音楽番組で、演奏者や楽器を超弩級アップで撮る、何てことは当たり前のように行っていますが、そんなことを始めたのもこの番組だったと思います。演奏の魅力を聴くだけでなく「魅て」もらう、そしてその演奏者の「人を魅せる」工夫もしていました。

番組は30分番組で、CMがありますから、正味23分しかありませんでしたので、曲によっては本当に大変でしたが、音楽を流すだけにならないようにいろいろなアイディアをいつも沢山、沢

山考えて提案していたのが山本直純さんでした。直純さんなくしてはこの番組はあり得なかったと思います。(演奏家を納得させ、企画を考え…直純さんは音楽監督でもあり名プロデューサーでもありました)

その中で私は、元々音楽をよく知るマニアでないという立場から、直純さんたち音楽のベテランが番組の内容・構成を決めて行く中で、クラシック音楽に余りなじみのない視聴者でも興味が持てるかどうかの基準=「視聴者の目線」の役割を担いました。そして、クラシック音楽は難しくもなければ、堅苦しいものではないことを優しく説明することが大切だと考えていました。

番組は公開録画ということで日本全国各地のホールにも行きました。地方に行ったのは、当時の電電公社の電話料金改定のPRも兼ねていた訳です。時には地元のオーケストラにも参加してもらい、テレビを通じて地方のオーケストラを紹介することも出来ました。

### 難しいことをやさしく手渡す

私は番組を2年で卒業しましたがオーケストラとの公開録画の旅の想い出は忘れられない記憶として残っています。

番組は10年半の長きに亘りましたが、民放の視聴率競争もあり、最終的には終わってしまいました。今考えれば、「難しい事をやさしく手渡す」をモットーにしていたつもりでしたが、やつていく内にチームが詳しくなり過ぎたのでしょう、「難しい事を教える」ような事になってしまったのかな、と思ったりしています。

その後、私自身は「遠くへ行きたい」という旅番組のプロデューサーを40年務めたり、他の音楽番組を作ったりもしていますが、DVDを見ていて時間も無くなってきたので、この業界に関係のあるテレビマンユニオンの音楽事業の話だけします。

「オケ来た」のあと萩元さんを中心にクラシック音楽を事業としてやっていくことになり、サントリーホールのオープニング企画に引き続き御茶ノ水・カザルスホールの企画制作を行いました。

カザルスホールができる時には、室内オケの連続演奏会、ホール専属クアルテットの結成、チェロの連続演奏会、などなどの他、現在も続けているのが「アマチュアにもコンサートホールで演奏を」という企画で「アマチュア室内楽フェスティバル」を催し、今年(2015年)で25年経ちました。また、オーケストラで一番地味だと言われるヴィオラをフューチャーした、「ヴィオラスペース」という企画も24回目で今井信子を中心に行ってています。これはその後、紀尾井ホールとの共催、今は上野学園・石橋メモリアルホールとの共催となり、その発展型として「東京国際ヴィオラ・コンクール」を3年ごとに行うことになり、今年は3回目。来る5月30日~6月7日まで石橋メモリアルホールで行われます。

### もったいないカザルスホール

カザルスホールについては皆さんご存知の通り、日大がカザルスホールを買った訳ですが、当時カザルスを買う事を決めた理事長も退任し、その後、貸し館もやめ、一般公演は閉館となってしまいました。室内楽の殿堂として内外の演奏家に親しまれていたコンサートホールでしたので、本当にもったいない、残念な事です。

その後は、テレビマンユニオンがカザルスホールで培ったクラ

シック音楽事業の流れを続けるため、2012年まで音楽部長を務め、今も折に触れスタッフとして活動しています。

テレビマンユニオンの音楽事業部が室内楽、特に弦楽四重奏の公演などが出来ているのは、テレビ番組制作の本体と共に存在しているからだと思います。テレビの制作会社が文化としてのクラシック音楽に何らかの役割を担うという構想のもとに行っている「音楽事業」ですから、「自分たちがいいと思うものを皆さんに来て、聴いていただこう」ということで進めています・・・。

時間が長くなりましたがこのあたりに致します。ありがとうございました。

2014年6月11日 音楽プロデューサー協会例会にて



## 音の記憶～虹色の水晶～

(株) ユーラシック 代表取締役 村上雄一

大聖堂の宙から閃光の如く降りおりてきた虹色の水晶の柱、眼でも捉えることができそうなその音の塊は、いまだ思い出すたびに鳴り響いてくる

パリのサン・ラザール駅に着いたとき、その直前の訪問地イギリストとは違った空気が漂っているのを感じ少し不安になった。1986年に歳30で初めてヨーロッパ旅行に出かけて2ヶ月目の4月のことだった。指揮者Kからパリに来るときは連絡をくれと云われ、Kのパリ・オペラ座デビュー公演「サロメ」のリハーサルになんとか潜り込めた。しばらくの間、銀の皿に血で染まった預言者ヨカーンの生首が現れるオペラのリハーサル舞台を楽しんでいたが、ちょっと気になったのはオペラ座客席の天井画だった。絵の好きなものであれば誰もが知っているシャガールが描いた絵がそこにあった。

リハーサルが終わり、楽屋にKを訪ねた時のKの驚いた顔をいまでも覚えている。どうやって入ったんだ、ここはセキュリティが厳しいので簡単に入ることができないはずだと。いや簡単に入れたよ、と応えた私を見てKはきょとんとしながらも再会を喜んでくれた。そしてどこのホテルに泊まっているのか、と私に尋ねた。ブランシュにある安宿だと応えると、Kはすぐさま驚いたように、何ブランシュだって？明日にでもホテルを変えたほうがいい、ブランシュはパリでとても危ない街だからと。でもブランシュにいるんだたらひとつだけいいことがある、と話を続けた。ブランシュから南に少し下がったところにサン・トリニテ教会があり日曜の朝にはミサがある。そしてミサの最後にメシアンがオルガンを即興で演奏するので聞く価値がある、と。そう、メシアンは22歳から1992年に亡くなるまでサン・トリニテ教会のオルガニストを務めていた。メシアンの弟子だったKがそのことを知って

いたのは当然のことであった。

さっそく次の日曜の朝にサン・トリニテ教会に足を運ぶと、私の安宿から歩いてほんの5分くらいだった。教会に着いて入口の重い扉を開けてなかに入ったとき、すでに大聖堂ではミサが始まっていた。どこの教会にもあるような硬い長椅子に座って、しばらくのあいだ抑揚がついた呪文のような言葉のわからない説教を聞き流していた。一時間ほどたつだろうか、神父たち数人がなにかザルの形をした入れ物を持って聖堂内を歩き回りはじめた。最初なにが始まったのかわからなかったが、まわりの信者らしき人たちがそれにお金を入れていた。そうか、お布施を集めているのだと気がつき、私の前に差し出されたとき5フランを入れたのを覚えている。これでミサが終わるだろうと、でもまだメシアンの即興オルガンが始まっていないと心の中でつぶやいていた私は、今日はオルガン演奏がないかもしれないと急に不安に駆られはじめた。

そしてミサに集まっていた人々が大聖堂の静寂のなかで席を立ちはじめ、お互いの隣人と握手を交わし何人かが出口に向かうやいなや、突然稻妻の閃光が如くの速さで大オルガンの轟音が大聖堂の宙から降りおりてきた。かつて経験したことのないその音の塊は、いわゆる大オルガン特有の荘厳な響きというよりむしろ巨大な虹色の水晶の柱が宙から大聖堂の石床をめがけて突き刺してくるような音だった。音に虹の彩りと硬質で透明な立体感を感じたのはこのときが最初で最後だったような気がする。メシアンの

前衛的な即興オルガン演奏のあいだ、眼でも捉えることができそうなその虹色の水晶の柱に全身を貫かれ、茫然自失だったことを29年経った今も忘れることができない。

今回記憶の井戸のなかから29年前の泉をどれだけ汲めるか気がかりだったが、このときの「音の記憶」がすっかり枯れてはいなかったのはメシアンのお陰かもしれない。



Église de la Sainte-Trinité

## 環境が激変しても変わらないことが!

インターネット「クラシック・ニュース」プロデューサー 藪田益資

私が音楽ビジネスの仕事を始めた頃、1960 年台の事情と驚くほど変化をたどっている。

当時はコピー機がなくてすべてカーボン紙で手書きの複写出来る便箋によるコミュニケーションだった（メールで CC あるのはカーボンコピーでその名残？）。急ぎでの連絡は電報を使った。郵便局で「朝日のア」、「いろはのイ」「上野のウ」などフォネティックコードを使って発信した。受信も電報局からの電話でフォネティックコードを電話で聞いていた。

道路事情も悪かったためあらかじめ荷物を送るということも難しかった。音楽家は各駅で「赤帽」に運送を頼んだ。

出演料の支払いもすべて現金払いだった。時にはジャラジャラと主催者が集めた売上の小銭を袋に詰めて支払っていただいことがある。

通信インフラの革新的な変化は大きい。電話は交換手の手を経ないで市外の通話は出来なかった。東京から大阪への通話も申し込んで、急ぎの通話は別途料金を請求された。確か一通話が 3 分で 350 円位だったような気がする。

留守だとその金額がパーになった。そのため、あらかじめ電報で通話の時間を連絡するといったことをしていた。

電話も簡単に個人の家に届けなかった。一本の電話も 2 ~ 3 軒でシェアするような時代で、スマホでの個人の電話は夢の世界の出来事だった。

チケットの販売も、各プレイガイドにチラシを配布しながら販売してゆくような方法だった。1 枚 1 枚のチラシに願いを込めて、この 1 枚のチラシで 1 枚のキップを販売するという意気込みであった。タクシーでチラシを大量に積んでプレイガイドに配布も大切な仕事だった。今のチラシ撒きという大量消費の状態では 1 枚のコストが無感覚になってしまってばら撒かれて

いるという悲しい状態である。戦後、まだ日本が貧しい時代を経てきたばかりだったのだろう。

新しい時代を迎える個人の仕事に対するやり方の変化も生じ、現在では PC やスマホ、タブレットと対面してゆく方向になった。当然のことである。

人の対面による仕事は変わっていないはずである。PC との対面だけで仕事が進み相手の息遣いが全く無くなってしまうのは寂し限りである。

仕事のあり方について、各個人がそれぞれの専門分野に細分化されて、広報・宣伝部門、チケット営業部門、アーティスティック部門とて別れて、相互に連携作業がなかなか取れにくい。

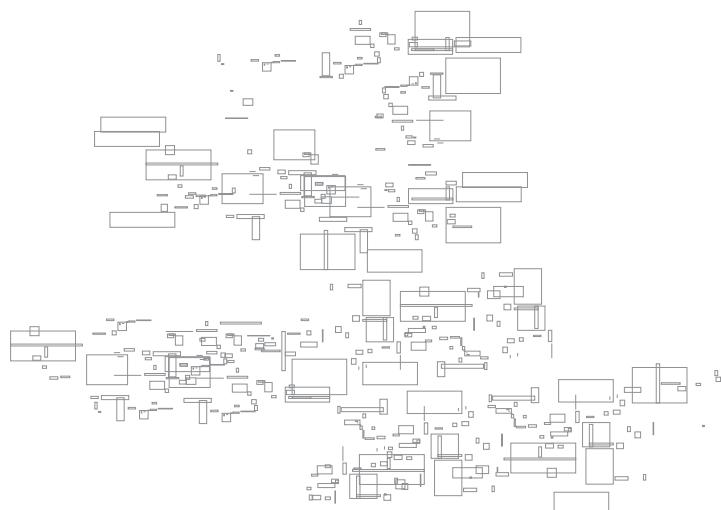
コンサートをプロデュースして、その責任範囲もアーティスティック内容への責任、販売に対する責任、広報宣伝に及ぶ責任など多岐にわたる部分に係る必要がある。

オーディエンスのコンサートにたいする希望などの末端の声のリサーチをどうするか？

細分化された結果、その辺の声を吸い上げているだろうか、聴衆の生の声の反応をどう反映させる事ができるかという重要な事が抜け落ちてしまいそうである。

コンピューターの驚くべき発展が 90 年台から始まり、21 世紀に入ってコミュニケーションについて大きく変化していった。まもなく FAX でも時代遅れの産物となってしまいそうだ。クロネコヤマトも大きな変化を担う役割を果たしたと言えそうだ。

このような激動の時代でも「音楽」は多くの人の心に喜びを与える重要な要素として残ってゆく。





## ベートーヴェンは美しい

勿論大事にしている  
愛聴盤なので売るつもりは毛頭ありません。このCDは再販されたもので、レコード全曲盤も所有しています。となると、こちらはいく

付いていました。  
価格でした。そのCD全  
曲盤がネット上で50万  
円という価格で取引き  
されていました。確かにイン  
ターネットを見たら49  
万何がしという価格が  
付いていました。

私が住んでいる大磯  
町で友人が月に一回、  
「モノラルレコードの  
会」というのを開催し  
ています。毎回内容を  
決め3時間弱の会合で  
す。あるときベートー  
ヴェンの交響曲の演奏  
があり、ハンス・シュ  
ミット・リッセルショ  
ケット／ヴィーン・  
フィルの演奏の話にな  
りました。このレコード  
はステレオLP盤なの  
ですが、私が学生だった  
約45年前に発売さ  
れ、当時二万円という  
価格でした。そのCD全  
曲盤がネット上で50万  
円といつて、確かにイン  
ターネットを見たら49  
万何がしという価格が  
付いていました。

地味な曲に美しいも  
のがあるので、名曲ば  
かりでなくこういった  
曲を聴いてみるのも樂  
しいものです。

うになりますのかと考えて  
しまいます。そこで最  
近初期の交響曲を聴き  
始め、第2番の美しさ  
に感動しています。特  
に第2樂章の何とも言  
えない美しさに、つい  
繰り返し聴いてしま  
います。ベートーヴェン  
の緩徐樂章では第9番  
の第3樂章が天国的な  
美しさで知られています。  
ですが、それに勝るとも  
劣らずといった味わい  
です。勿論こちらは初  
期の交響曲なので完成  
度としては第9番に軍  
配が上がるのでしょうか  
が、一聴に値する名曲  
だと思います。ピアノ  
ソナタ第27番作品90も  
二樂章形式の曲で、小  
さいがとてもきれいな  
曲です。

中根俊士

地味な曲に美しいも  
のがあるので、名曲ば  
かりでなくこういった  
曲を聴いてみるのも樂  
しいものです。

Classic Vicus 第10号 2015年5月 音楽プロデューサー協会発行 編集：志村嘉一郎 デザイン／イラスト：梅津知美

### 音楽プロデューサー協会会員

在原 勝	(株) 東京プロムジカ 代表取締役	萩生哲郎	ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
石川尚樹	(株) コンセールブルミエ 代表取締役	橋本伸一郎	(株) いちべる 代表取締役
上野喜浩	すみだトリフォニーホール プロデューサー	原 浩之	ハクジュホール ((株) 白寿生科学研究所) 支配人
内田一成	(株) フューチャーデザイン 代表取締役	平井 満	横浜樂友会／鶴沼室内樂愛好会 代表
梅津知美	(公財) 多摩市文化振興財團 音楽プロデューサー	広瀬光康	(有) 新演奏家協会 代表取締役
江藤昌子	こぶしらぶ主宰 プロデューサー	松崎三恵子	(特) 日本青少年音楽芸能協会 理事長
小川光彦	アーツコム東京(株) 代表取締役	松本京子	(株) シド音楽企画 代表取締役
兼岩好江	(有) アルシュ 代表取締役	丸田 朗	(有) おふいすべが 取締役
榑松大剛	ロングランブランニング(株)(カンフェティ) 代表取締役	村上雄一	(有) マルタミュージックサービス 代表取締役
黒川浩明	(有) 大阪アーティスト協会 代表取締役	村田 亨	(株) ヨーラシック 代表取締役
向後由美	アッコルド出版 (Web アッコルド)	敷田益資	(株) テレビマンユニオン エグゼクティブプロデューサー
小林信一	一般財団法人合唱音楽振興会 事務局長	吉井實行	インターネット「クラシック・ニュース」プロデューサー
	東京混声合唱団 常務理事		公益社団法人オーケストラ連盟 専務理事
斎藤 茂	O T T A V A(株) 取締役 ゼネラルマネージャー		
佐々木仔利子	(特) 日本室内楽アカデミー 理事長		
佐瀬 亨	せきれい社 (雑誌「サラサーテ」編集) 代表取締役	代表幹事	中根俊士
志村嘉一郎	ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人	幹 事	敷田益資 村上雄一 榛松大剛
白神克敏	(株) ヴォイシング 代表取締役	監 察	梅津知美 向後由美
高原加代子	(株) ミリオンコンサート協会	事務局長	志村嘉一郎
寺田有佑	(株) 日本アーティスト 取締役会長		丸田 朗
戸部由起子	(有) エクレジアアーツ 代表取締役		
中根俊士	(株) 東京アーティスツ 代表取締役		
中村由美子	リモージュコンサート(株) 代表取締役		

Onigaku  
Producer  
Kyokai

2015年5月現在